

鳥の遊び 小島きみ子

あれは鳥の嘆きの声。
 人を葬る時の真似事を《鳥の遊び》と古代の人は言った。
 その遊びを鳥族は忘れないのだろうか。
 あの朝も鳥が鳴いていた。
 私はその明け方で、
 期末試験の勉強を父のベッドの下でしていた。
 丸まって。
 毛布にくるまって。
 親戚の者が急に来て、
 (しっかりとするのよ)と言った。
 父はもうすぐ死んで鳥の国へ行くのだ。
 父はみんなにありがとと言った。
 みんなと握手した。
 父は眼を閉じなかった。
 神社に幟旗がたっている。
 村の有線放送が、
 鳥族の言葉で何かを言っていた。
 父が死んだのだ。
 村は鳥の国になっていた。
 白い花が雪のように降っていた。
 うつぶせに眠る父の上に私が蹲っている。
 野茨の甘い香りのなかで蜜蜂が舞っていた。
 その幽かな羽音がずっと続いている。

方舟 米山浩平

おまえを路地に
 誘きよせたのは昨日までの弟
 石油を浴びせたのは顔見知りの兄
 未知の妹のこするマッチ棒を
 にせの父親が投げ入れた
 弟の合図で、鳩の群は一筋の楯をも幽閉し
 まつくらな白日が息を吸いこむ
 やがて鳩は散らばり
 光が事態に輪郭を被せた
 くすぶる灰のうえ
 4人の重なる掌の甲
 おまえに、ふたたびの命を与える
 いちどめの洗礼を終えた後
 わたしたちは甦る
 つぎの生命のために
 つぎの世を取り戻すために
 居合わせた布陣は家族を名乗る
 そう遠くはない昔
 山羊が牧場主を裁判で訴え、
 原告席に立った記録が残されているという
 動植物が他言語をまなび
 同等の権利を主張していた時代
 ちいさな障壁にあらが
 異教の原理が市井に咲きこぼれていた。
 夜ふけに訪れる天使のしゃがれた告知
 聖母像の有性繁殖
 無類の混血をはぐくむ。
 おまえが生まれ変わるとしたら
 蕨の湿った畜舎の隅だ
 まぶたの裏へ投射してみる
 近世の博物誌に描かれた、
 生物と直立不動の人間が均質に並んでいる図版のように
 列をなしている
 海に向けて、ひとりずつ
 あるいている
 異種の防波堤は決壊した
 馬の首を語る聖母が鞭を打つ
 スフィングスの号令
 むこうがわで
 逆光を浴びて方舟が口を開き
 待っている



よひら町 森山 恵

渡つてはだめ
 そう言い聞かされていた路地裏の踏切を
 夢のなかで渡る
 ひとり
 見知らぬ風景
 さびしい野原と黒くたわんだ電線
 火事で焼焦げた、まるきん自転車工場跡
 線路脇の金網がいかに吠く、みず色のあじさい
 線路に耳をつけても列車は遠のいていくばかり
 ものさびた夕ぐれ
 少女も手を振りながら 踏切の向こうへ
 あわいみず色に薄れていく
 あじさいの花びらの上 カタツムリが這う
 貝の中にもぐり込んでいた
 やわらかな体が這い出し
 雨を吸いこんで大きく膨らみはじめる
 少女があじさいの穂を投げ上げる
 いくつも
 跳ね上がるスカートのはら
 重力をなくしたあじさいは空に浮かびあがり
 ひざ頭 ひらめく
 空に浮かぶいくつもの
 穂 穂 穂 穂
 少女が触れたものはみな 空で踊る
 地は水をたたえて潤む
 空き地にテントを張り 夜通し雨の音を聞く



パンゲアの食卓 二条千河

覚えていたか
 パンゲアの子どもたちを
 毎朝 大きな食卓を囲んで
 屈託もなく笑っていた
 言葉をおまきなくつた
 心はいつもひとつ
 彼らの暮らす大地がひとつだったように
 その大地が 遠い昔
 広い海のあちこちに分かれて
 散らばっていた時代もあったなんて
 誰も信じようとしなかった
 (だってそれじゃどうやって
 いっしょにごはんをたべたり
 ひなたぼっこをしたり
 うたをうたったりすればいいのさ?)
 しかしその問いを
 心もたちには口になかった
 心がいつもひとつなら
 自分の知らないことは誰も知らないのだ
 彼らにはきつと想像できなかったらう
 同じ星に暮らしているがら
 ばらばらの場所
 ばらばらの食事をする なんて
 (おなかはずくのほ
 みんないっしょなのにな?)
 超大陸パンゲアには
 子どもたちだけが暮らしていた
 毎朝 大きな食卓を囲んで
 倦むこともなく笑っていた
 心はいつもひとつだったから
 自分が知っていることは誰もが知っていて
 言葉を交わす必要がなく
 伝え合うべき物語もなかった
 覚えていたか
 パンゲアの食卓に響いた歌声を
 題もなく詞もなく
 旋律だけで語られる歴史が
 ただひとつあつたはずなのだが



手袋 平井達也

背びれを揺らして泳いでいるところを
 素手で捕まえようとしたって
 きつとあなたは滑って逃げてしまうから
 専用の手袋を用意しようと考えました
 どんな仕掛けを密かに縫い込むべきか
 いんちきなインリアル?
 診断書の上半分?
 なかなか知られていない法?
 よく知られている法?
 匂う動物?
 だめだね
 だめだね
 きつとあなたは
 あなたを守ってくれる大切なご主人の待つ
 湧水に近い水草の住まいに向けて
 全力で泳いでいってしまうね
 手袋が冷たく濡れるだけだね

(いきなり夢の過剰投与、ah overdose!.....)

たなかあきみつ

いきなり夢の過剰投与、ah overdose!
 晩夏の扇風機は脳回をとりと半円形に
 なま温かい風を振りまいては極北をじんじん回ると
 いまや出来損ないの孔雀の番だ!
 だから脳回って、暗赤の縁取りのダリア戦線?
 それとも血のあくまでも馬頭の
 ふたたび充血装備のどろどろの骰子
 日没までさあ急げや急げ
 舌であり錠前でもあるダリアよ、血のパラードすら入鉄済みだ
 放火にいそむ裂肉雨におびえるどころか
 重力にからきし無抵抗で毎のイチジクのバックは
 既視たんたんとタリの厨房のパン籠の真下に落下する
 回文を舌支えし可食性の辞書の蠟をキサスキサ褶曲しつつ
 緑のヒロインらの
 口々に、銀影を吹きつけて
 かくれ帽子(正確にはテンガロンハット)なき
 茹で卵よ、むしろ手負いの潜水卵
 それとも二卵性でなおかつ青天井下のケーソン病?
 逃亡先の通行証は気もそぞろに爪証証にまで進行するの
 爪を見れば(脱白した薬指の爪にもタテ割レの子兆)
 目玉が本物の無煙炭ながらキラッとひかる?
 あるいは風向したいの、EYESとてパネ指か
 トンボ由来の赤い救急ヘリコプターの
 折からのローター音がざざざあ降ってくる
 影の波動力学よ危うり波乗りのように
 折からの千切れた風と一騎打ち
 季節を問わずからからに乾燥した落ち葉のように
 読唇対象の昼には千からびた蝙蝠
 筋張った葉脈をなおも浮きたたせ
 夜首の新調したブレッドでなくとも
 血管の見えぬ蝙蝠の翼を横殴りに撃てよ陽光
 ワイヤレスの影絵劇
 拳対空気のエンドレスのシャドウボクシング
 不規則に割れつづける眼鏡のようなタウ物質の底なし
 この薄刃のシャドウパンキングこそ
 蝙蝠傘のひんまがった骨々の逆噴射
 これも野心的な《ワイヤの破断》により
 空っぽになって
 とことん身軽になつて
 空中に身を乗りだしさらに
 空荷の身をよじらせる

ぼつんとしていた 北爪満喜

まだ 私の小さかった頃
 季節ごとに 送られてきた東京からの包みには
 親戚の子の着た服が入っていた
 水色に白いレースのアクセントが横に入ったツーピース
 白地に大きな青い水玉が全体に散っているワンピース
 チェックのフリースカート
 藍色のフリースカートの裾に
 黒いアップリケでシルエットになったカボチャの馬車が走っていたのや
 フリルのたくさんついたブラウス
 小学校では誰も着ていないデザイン
 の服に包まれて
 教室で いつも ぼつんとしていた
 思い浮かべ
 赤信号が 青に変わるまでの間に
 親戚の子は大学生になって
 詩の本の店でアルバイトをしていて
 私は高校生になって
 受験の模試のために東京に出てきては
 そのお姉さんの家に泊まり
 バイト先の詩の本の店に遊びにいった
 ずらりと並んだ詩集の棚を
 おそろおそろ眺めたり
 見たことのない変わったタイトルの本を抜き出し
 手に取った 風景が 淡く 昼に揺れ
 小さい頃はお姉さんの着た服が私を包み
 中身は私
 高校生になったらお姉さんのバイト先の詩の本の店が私を包み
 そのうちに私は詩集を作つて
 詩の本の店の中身になった
 そういうことなの?

横断歩道を渡りながら
 包みと中身の
 荒っぽい対応を今頃みつけて
 首都高の高架橋にそって
 じりじりと暑い夏を
 ヒールのあるサンダルでぐらぐら歩く
 滴つて
 詩の中に 滴つてゆきたい
 揺すぶられ
 視界を混せる



おうむ 池田 康

博士の籠を抜け出た
 無学なおうむが
 電信柱のてつべんにとまつて
 昔おぼえた
 自分では意味がわからない
 叔智の言葉を
 わめきらしているのだが
 街ゆく人は
 こちらもちんぷんかん
 季節はずれの土砂降りがふつてきた
 とでもいうように
 迷惑そうに上を見上げている
 博士は菜園を探す
 旅に出て
 永遠に
 帰つてこない

